

2021 年全国交流大会「脱炭素時代を生き抜くために、 私たちに求められる考え方と暮らし方」

事務局

12月4日(土)開催の、全国交流大会の概要をご紹介します。

当日は、藤村代表から開会のあいさつと趣旨説明、次いで北海道大学の橋本努教授から話題提供と質疑が行われました。さらに、環境倫理部会からの報告の後、今回のテーマについての意見交換が行われました。

1. 趣旨説明

藤村コノエ(環境文明 21 代表)

パリ協定に基づき各国が脱炭素の方向に舵を切り、本年 11 月の COP26 では 1.5℃ 昇温に留めるために努力することが合意された。日本も 2050 年までに脱炭素を達成することになったが、将来の不確実な科学技術に依存するばかりで、抜本的な対応策はいまだ出ていない。世界の炭素予算(1.5℃ 昇温に留めるために今後排出できる炭素量)は残り少なく、地球の限界が見えてきて、世界的にも「行動」が大事という認識が進んでいるが、そうした中で今なぜ倫理なのかといえ、次のような理由による。

第一にこれまでとは異なり地球の限界が見え、必然的に変わらなければならない時代になってきたこと。第二に気候危機には長期的取組が不可欠であり、そのためには、小手先の対応ではだめで、的確な科学的知見と併せてしっかりした倫理観や価値観の基盤が不可欠であること。そうでなければ、あふれる情報に翻弄されたりして、継続的な行動ができない。また、当会は「環境問題は文明の問題」と考え、環境倫理についてずっと議論してきたが、3 年前から「脱炭素時代を生き抜くための環境倫理」について議論してきた。

本日はその成果を報告した上で、参加の皆様から更なるインプットを頂き、環境文明 21 からの「提言」として世に問いたいと考えている。

2. 話題提供：

「ロスト欲望社会～エコ・ミニマリズムのすすめ」
橋本努氏(北海道大学大学院経済学研究科教授)

(1) 戦後日本社会における消費文化・

消費社会批判の概要

戦後日本社会を社会哲学の観点から、近代(1945-1960s)、ポスト近代(1970s-95)、ロスト近代(1996-)に区分した場合、各時代における消費スタイルの変遷とともに、消費社会への批判のモードも変化した。

近代は合理性・効率性を重視した結果、大量生産・大量消費の社会だった。近代化が進行し、それまで家庭で手作りしていたものが何でも買えるようになると、それに伴い失われていく「家」の自律的な機能を維持し回復する手段として手芸や DIY が広まった。更に、大量生産・消費社会の負の側面を克服しようとする動きの中で、『暮らしの手帖』の商品テストに代表されるような商品の批判的評価や、生協や有機農法ネットワークの構築といった取組も生まれた。

続くポスト近代社会では、消費の個性化・差別化そして多品種・少量生産が進み、バブル期には人々が競って豪華なブランド商品を求めるようになり、消費を通じた承認欲求が高まる現象(記号消費・顕示的消費)が進行した。同時に、このようなく他人に見せびらかすための消費の浅薄さが批判され、消費社会批判が一つの時代のブームとなった。

ロスト近代社会では、「家」の機能、「消費者団体」の役割、生産・消費・流通システムが変わっていく中、ネット社会の充実とも相まって、デジタルで自分の潜在的可能性が広がるような商品に人気が集まった。アップル社の iPod が良い例で、ポケットサイズの機器に多くの楽曲をダウンロードし、人に顕示することなく自ら楽しめることから、若者を中心に広く受け入れられた。更に、若者の収入減少による消費性向の変化（消費<貯蓄）や日本人の国民性としての自然志向を背景に、欲望消費はこれまでとは別のモード、シンプルな日常を志向する消費スタイルに変わっていった。その流れの中でミニマリズムという、日本発の生活スタイルが生み出された。

折しも世界は地球温暖化に伴う新たな局面に入り、環境に配慮し CO₂ 排出の少ない消費生活が倫理的だと考えられるようになった。そこで、物を持たない、環境負荷の少ないミニマリストが倫理的消費の手本ではないか、彼らに学ぶことで環境問題に対応していけるのではないかと考えられるようになった。

(2) ミニマリズムについて

一般的に環境問題の解決には欲望の克服が必要とされるが、英国の哲学者ケイト・ソパーは、社会の進化の過程で人が快樂と感じる事柄が変わり、環境によいものを快樂と感じるようになるので、快樂原則に基づいて生活すればよいと論じている。

ミニマリストたちも、物を持たないことから得られる快樂を求めてミニマリズムを実践しているようだ。多くのミニマリストの中でも、近藤麻理恵の『人生がときめく片付けの魔法』（2011年）は1,100万分以上売れ、40カ国以上で出版され、アメリカで

は Netflix の番組にもなった。

日本でミニマリズムがブームとなった要因として、スマートフォンの普及によりカメラをはじめとする様々なものがスマートフォンで代用できるようになったことがあろう。もう一つは、非正規労働者の増加等による収入の低下ではないかと考えられる。

日本のミニマリストは禅の思想と関連があるのではと思える点もあるが、禁欲ではなく、楽しく落ち着いた生活を求めて瞑想を好み、最小限の稼ぎで、物を買わずに楽しくシンプルな生活を志向する場合が多い。アップルのスティーブ・ジョブズは禅の思想を踏まえてシンプルで創造的な生涯を送ったが、彼のような人生にあこがれてミニマリスト生活を実践する若者もいるようだ。

(3) まとめ

欲望の消費は倫理的でないといみなされる傾向があり、近代社会では生産の主体化（自ら生産する）、ポスト近代社会では洗練された高度な文化（文化的に洗練された人々が築いた精神文化）の体现が、欲望を克服する手段として重要と考えられた。ロスト近代社会になると、現代人は多くのモノを求めず、シンプル・自然志向の消費を倫理的と捉えているようだ。環境問題の専門家に言われてやるのではなく、自身が心地よいという理由でミニマリズムを実践し、それが SNS 等を通じて拡散する動きが特徴的である。

ミニマリズムは現在の資本主義社会・経済の下で実践されており、新しい資本主義を作ろうと意図しているわけではない。しかし生活スタイルを変える要素を持つミニマリズムは、新しい社会を創っていくダイナミズムを提供しているように思う。禅僧のようなミニマムな空間で生活する知恵を持ったミニマリストは、資本主義を一步降りたところで豊か

な生活が送れる可能性を示唆しており、彼等が資本主義を変えていく力を持ち、彼らに支えられて資本主義が成り立つ時代かもしれない。最近では消費社会への言説が減少し、特に食品ロスについての議論が不足している点が

懸念されるが、消費社会批判を行う知識人がいなくなった現在、「下からの啓蒙」としてミニマリズムがあるのでないか、それは禅に近い思想ではないだろうかと考えている。

(文責：事務局)

【ディスカッション】

倫理観

- 自分の損得で判断した結果が、地球にとっても快で得なのかどうかを考えるベースとして倫理がある。
- ヒトの脳の構造から考えると、ブレーキ役の脳がつかさどる倫理をベースにして、脳幹部がつかさどる行動を起こそうとするのは無理があるのではないかと思う。
- ブレーキとなる脳をしっかりと働かせるために、倫理のような規範を身に付けていくことが重要ではないか。
- 一気に行動変容できないので、段階的に生活の在りようを変えていくが、その際に向かうべき方向を示すのが倫理だと思う。
- 若者の環境活動がしっかり根付くためにも、ベースとなる倫理観（考え方や理念の確立）が必要ではないか。
- 長期的で社会全般にわたる抜本変革には、倫理観に基づく意識変化が必要だと思う。

普及啓発

- 効果的な普及啓発のためには、一般の人にわかりやすい言葉を使う必要がある。
- デジタルネイティブ世代にとって、社会を変えることができるのはSNSなどを介した情報。データに基づく行動分析を基にレバレッジポイント（介入点）を考えるべき。
- SNSで一回でも環境関係の情報にアクセスすると類似情報が得られ、気づきにつながる可能性があるように思う。
- 個人が行動変容を進めるためには、政府キャンペーンなども必要。
- 現在は低い環境情報の市場価値を上げて、ラジオ放送やFM放送を使って拡散してはどうか。資本主義本来の自由さを活かし、楽しく生きるを目標に、事例を示して行動を促す手法。
- 各家庭で「エコライフ・マイスター」を決め、家庭での環境倫理実践を促進するのも一つの方法。
- 倫理だけでは行動規制はできない。電気料金等の末端価格を上げる必要もある。
- 余計な活動をしないことが環境負荷をかけない生活だと考える人もいれば、積極的な環境活動が環境負荷の低減に繋がると考える人もいる。行動とは何か？
- 環境危機が重大化すれば、倫理に関わらず生活自体が変わらざるを得なくなる。

教育

- 倫理観の基になる発想力を育てない日本の教育が、個々人の意識が変わらない根本原因ではないか。
- 長期的効果が期待できる教師育成に、即効性のあるSNSなども組み合わせて、重層的に進め

てはどうか。

- 高等教育のあらゆる分野で環境について教えることにより、社会全体の意識を変えることになるのではないか。
- 歴史的にみても教育は単に体制の価値観をすり込むことになっており、教育で社会は変えられない。環境教育の成果は期待できないのでは。
- 教育が直接社会を変えるわけではなく、社会を変えるために動く人を育てるものであり、それが欠落すれば当然人も変われないし社会も変わらない。
- 世の中を徐々に変えていくのは個々人の嗜好、価値観であり、若い時期の育成が重要。
- 幼児体験を基盤に、その後の学習を通じて価値観や行動規範が変わっていく。明治維新でも教育は社会変革の原動力になった。
- 経済第一主義の世の中で、ベーシックインカムなど最低限の保障がないと環境に思いを致す余裕がなく、教育効果が出にくい。

提言について

- しっかり考えて行動する人が少なくなっている今の世の中で、倫理を踏まえて考えることの重要性を共有したい。
- こういう提言は積極的に出していくべき。社会の意識形成の種まきともいえよう。
- 今回の提言はIPBES(生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム)のtransformative change(社会変革)という考えに近い。
- あまり極端なことは避け、経済発展をある程度認めながらやっていく方向でなければ難しい。
- 懐を深くして世の中全体がよい方向を向くようにすべき。規制を厳密にするのがよいとも言えない。
- 堅苦しさを避けるため、「○○しよう」ではなく、「○○しないようにしよう」というアピール方法も検討しては。
- 大企業は自らの利益を考えるばかりでなく、世の中の動きに則して資金をなるべく良い方向に使うべき。
- ゆでガエル状況で進行する温暖化への意識向上のため、ある程度の脅かしも大事ではないか。
- 政治に関わる倫理観について、格差社会の日本で投票率も上がらない中、一部の人だけで政治決定が行われる世の中をどう考えればよいのか。
- 投票率が上がれば政治も変わる。

<提言についての橋本氏コメント>

ミニマリストたちの倫理は「シンプル・簡素」ということ。また現在、「ムダ・もったいない」につながるフードロスの議論が言論の空白となっていることもあり、<簡素・シンプル>と<ムダ・もったいない>という概念も加えていただけるとよいと思う。

※当日提案しました、『「脱炭素」時代を生きる覚悟と責任～NPO 法人環境文明21の提言』は環境文明21 HP へ掲載しております。また、2月号会報誌にも掲載予定です。

http://www.kanbun.org/katudo_n/bukai/2021rinri_teigen/2021rinri_teigen.pdf